

ケアにおける「手」の意味論

～非接触 (With コロナ) 社会と手～

Semantics of “Hands” in Care

—Lack of Contact (Due to COVID-19), Society and Hands—

結城 俊哉

YUKI Toshiya

要約

本稿は、新型コロナウイルス感染症が蔓延する人と人が「集う、交わる、つながる」ことができない非接触社会の中で生じている問題を扱う。具体的には、人が人を支えるケアにおける「手」が持つ意味とは何かを考察したものである。事例として、ブラインドランナーと伴走者をつなぐ「ロープ」の意味、視覚障害の人の「指文字」における手の意味を検討した。最後に、私達にとってケア場面における対人援助を支える「絆」の意味について考察した。

キーワード：手の意味、ブラインドランナー、視覚障害者、ケア、絆

Abstract

This paper describes the problems that arise in a contactless society where people who are isolated due to COVID-19 cannot gather, meet or connect. Specifically, it considers what the meaning of hands is in caring for other people. As case studies, we examined the meaning of the rope that ties a blind runner to their companion, and the meaning of hands in communication using fingers of the visually impaired. Finally, we considered the meaning of the bonds that support interpersonal assistance in the care sector.

Key words: Meaning of hands, blind runners, visually impaired, care, bonds

はじめに

現在（2021年1月時点）における新型コロナ禍において新型コロナ感染症（COVID-19）という「パンドラの箱」が開いた世界は、人と人との「つながり」（3密＝密集・密閉・密接）を回避・遮断（又は、禁忌（タブー））とする非接触社会（Withコロナ社会）と化している。

人々は、不要不急の外出制限などの自粛ムードの中で、あたかも「両手」を切断もしくは縛られたような感覚に囚われているのは筆者だけでは無いと考えている。

具体的な対応策として感染予防（公衆衛生）の観点から、仕事の仕方（働き方）に関して、対人接触に依らない方法としてオンラインを活用するテレワークが推奨されている。

しかし、人々の社会生活を支える仕事には、テレワークが可能な仕事ばかりではない。そのテレワークを可能にする人たちの生活を維持するための仕事があることを忘れてはならない。例えばそれは、日々のゴミ収集・物販・運輸・飲食業をはじめ、医療・福祉・介護・保育・教育の仕事である。これらの仕事は、「エッセシャルワーク（essential work：必要不可欠な仕事）」であり、まさに社会生活を支える基盤である。教育現場に関しては、オンライン授業が一気に導入され、現在、大学などでは、キャンパスに来ることもなく自宅でパソコンの画面を通した「通信教育」が日常化してきている。しかし、受け止め方や反応もさまざまだが、そこには学友との雑談・交流などは無く、新入生にとっては大学での新しい友人関係もできずにじわじわと孤立感だけが募る日々を過ごしている様子でもある。

本稿では、**非接触（Withコロナ）**社会において失われている「集う・交わる・つながる」ことのリアルについて「手^①」の意味を切り口としたケアの本質について検討する。尚、本稿において「ケア（Care）」という表現は、保健医療・福祉・教育等の専門家による専門的支援・援助にとどまらず、ボランティア活動を含めた日常的な支え合いの行為を総称した言葉として使用する。その意味で、分野や立場が異なっていたとしても「対人支援／援助者」を「**ケアの担い手**」と記述する。

1. 「手」という言葉と「痛み（悲嘆）」の関係

1. 「手」という言葉について

これから「手」が私たちの日常生活の中でどのような位置を占めているのかについて国語辞書での用いられ方を検討する。

国語辞書（デジタル大辞泉）の「手」に関する部分を以下に紹介する。

- ① ㊦ 人体の左右の肩から出ている長い部分。肩から指先までをいう。（以下省略）

① 手首、手首から指先までや、手のひら・指などを漠然と指す。「一に時計をはめる」

「火鉢に一をかざす」「一でつまむ」

……（中略）……

5. 実際に㊦のように作業や仕事を行うもの。
- ㊦労働力。人手。「一が足りない」「女—一つで子供を育て上げる」「男—」
 - ㊦仕事をする能力。「一に職を持つ」
6. 人が㊦を使ってすること。また、人の行為を漠然という。
- ㊦仕事。作業。「要塞の一を休める」
 - ㊦手数。手間。「一のこんだ細工」「一のかかる部下」
 - ㊦他人関与すること。「一出し」
 - ㊦武器を使って傷つけること。転じて戦いなどで受けた傷。「一負い」「深—(ふかで)」
……(中略)……
8. ㊦勝負事などで、手中にあるもの。手持ちの札、駒など。手の内。「一を明かす」「相手の—を読む」
- ㊦囲碁・将棋などで、石や駒を打つこと。また、その打ち方。「堅い—で攻める」「先—」
9. 事を行うための手段・方法。「きたない—を使う」「その—は食わない」「打つ—」
10. ㊦所有すること。「人の—に渡る」
- ㊦支配下。監督下。「ライバル会社の一の者」「犯人の一から人質を救う」
- (デジタル大辞泉・一部抜粋)

辞書の中には、この他にも「手」に関わる言葉の用例の数としては116が存在していた。筆者は、以前、拙書(2013)『ケアのフォークロア』においてケアにおける「手」の意味について以下のように論じたことがある。

治療・看護・介護の仕事を表す言葉の中に、今は、処置・介助ともいうが「支えるイメージ」としての「手」がふさわしいと感じたりはしないだろうか。「手間ひま掛ける、手始めに(関係の開始)、手を当てる、手を触れる、手でさする、手がける、手が届く、手をつなぐ、手を添える、手がかり、手をかざす、手を握る、手を振る、手探り、手加減、手料理」等々。「手」という言葉には、人と人、人との事との距離感・関係・思いのあり方まで表現する力があるようだ。

(結城 2013:172-173)

この引用した部分は、「関わる」技法としての援助的距離感の問題について述べた部分である。コロナ禍の昨年(2020年)4月の「緊急事態宣言⁽²⁾」から現在の1月の「緊急事態宣言」にいたるまで、さまざまな社会関係に「テレワーク」推進、「不要不急の外出制限」、「ステイホーム」(自粛生活・家庭内感染防止の自宅内マスク着用)の推奨がメディアを通して伝えられている。

しかし、対人支援／援助実践は、待った無しの状況(ケアの現場)そのものである。特に「保健・医療の現場」や教育機関や社会福祉(相談援助・介護・介助・保育)の現場などの機能を停止することはできない状況にある。

つまり、新型コロナ感染者だけでなく様々な病者の「生命」を守り、子どもたちの「学び・成長発達」を促進させ、人びとの「日々の生活（暮らし）」を支える機能を止めることは許されない。そのため、これらの仕事に従事する「ケアの担い手」の存在があってこそ「ケアの実践」が展開されるという前提条件をまず確認しておきたい。

現在、ケアの実践現場では、新型コロナ感染防止のために感染防止対策（ヘルスチェック（検温等）・マスク着用・手洗い・うがいの励行）を厳重に日々行っている。しかしながら、昨年（2020年）12月以降冬季期間に入り感染者（新型コロナのPCR陽性者）の急増に伴い、医療現場からは「医療崩壊寸前」や「現場の人手が足りない」と叫ばれている⁽³⁾。

つまり、対人援助のケアを必要とする人達を支援する「手」が不足しているということは、ケアの現場は、遠隔（間接）リモートでは賄えない「接近・接触・接続」（=3接）がその基本型であることを裏付けているのではないだろうか。

2. 「痛み」の原型について～喪失体験を抱える対象者～

ケアの担い手が支援の現場で向き合う「痛み」が帰属する対象者とは「誰か」についてここで改めて考えてみたい。

基本的なイメージとして、ケアを必要とする対象者（クライアント）は、「何かを喪失」し、それに伴う感情の「痛み（不安・恐れ・悲嘆）」を抱えた状態の人たちであると考えてみて欲しい。

この点について筆者は、以前、「対象喪失とケア」をめぐって以下のように考えて論じたことがある。

多くの場合、悲哀感情は、何らかの対象喪失体験をその基盤としている。なぜなら、私たちは日常生活の中で、事柄としては、「失業、死別、離別、病気、退職、卒業、引っ越し、失恋、親離れ、子離れ、老い、障害等々」という具体的なモノ、役割、場所、健康、事柄、人という有形でかつ認知しやすいものの喪失を体験する。

さらに、それらの対象喪失体験に伴うことも多いものだが、「名誉、希望、夢、期待、誇り（プライド）や他者との絆・信頼さらに自己肯定感（自分を認める）、自己効力感（自分の課題解決能力への信頼＝自信）、自尊心、等々」といった無形で認知しにくいものの喪失体験を同時に引き受けざるをえない理不尽な現実を抱え込むこともある。

つまり、人は、常に、「誰か（他者）」や「何か（モノ・役割・帰属集団等）」からの喪失体験」と共に自分の人生を歩む存在であることから逃れようもなく運命付けられている。

（結城 2013：87-88）

このように人の日常は、誕生したときから死去するまでの間、人は、＜何かを得ると同時に何かを失い＞続ける「生の存在」（生活者）として人生を歩んで行く。

その意味で、「幸福な人生」とは、その「獲得と喪失のバランス（調和）」が保たれていること

だと考えてみることはできないだろうか。つまり、ケアが必要な生活問題を抱えている対象者とはその「バランスを失っている(失調状態)」者であると理解するとケアの本質(原型)が見えてくる。

例えば、愛する近親者の「死」に直面した場合について考えてみると、遺族は、目の前からリアルな「生者」の存在を失い、「遺体」に手を合わせ(合掌)、彼岸へ渡る「死者」を悼むという「喪の仕事」(モーニング・ワーク:mourning work)を余儀なくされる。この「喪の仕事」には、対象喪失体験に伴う「悲嘆という心の痛み」が生じる。その意味で、お葬式という宗教行事は、「死者」の冥福を祈る(悼む)行為なのだが、実は、現世(此岸)にとどまっている「生者」(悲嘆にくれる遺族等)へのケア(グリーフワーク:grief work)の一環でもある。

そして、そこでは、ラテン語の「メメント・モリ⁽⁴⁾」(汝の死を忘れるな)と向き合いながら「自らの生の意味」について問い質される時間を共有することになる。その時、人は、「心(こころ)の痛み」から「抑うつ」状態に陥ることがあり、場合によっては精神科医やカウンセラーによる専門的な治療を受けることが必要なのだが、そこには、確かな「時間の治癒力」(時間という薬)が作用するとも言われている。

人の「生活問題」には、病気の治療としての「手術」(医療)から「手を添える」(看護・介護・介助・保育)、「学びの支援」(教育)、貧困対応としての「金銭的な手当」(公的扶助/生活保護)に至るまで、例えるならば将棋盤の上で展開される指し手のように、相手の抱える問題の出し方に応じた「適切な手」による駒の打ち方がケアの担い手に求められている。

II. 援助関係(ケア)におけるコミュニケーションとしての「手」の意味

～ブラインドランナーの伴走者との「共鳴」関係から考える～

ここで、美学・現代アートの研究者である伊藤亜紗は『手の倫理』(講談社)の中で、ブラインドランナー(=目の見えない視覚障害者のマラソンランナー)と伴走者とが手に持った「ロープ」を介したコミュニケーション関係について論じている。

具体的には、その二人の関係を「物理的-生成的なコミュニケーション」=「共鳴」する関係として位置づけながら興味深い考察を展開している。本章では、この伊藤が提示する「共鳴関係」というコミュニケーションの視点から「ケア」と「手」の意味関係について検討する。

1. 「共鳴関係」を生成するコミュニケーション～「ロープ」を介したシンクロ～

伊藤は、ブラインドランナーと伴走者との間に生じる「共鳴関係」を生成するコミュニケーションについて「ロープを介したシンクロ」として次のように述べている。

コミュニケーションという観点から伴走について考えるうえでまず重要なのは、「ロープ」の存在です。目の見えないランナーと目の見える伴走者は、直接体をふれ合っているわけではありません。ロープを介して、お互いの体の動きを感じ取っています。……(中略)……、人に

よってロープに好みがあることが分かります。毛糸のような柔らかい素材を自分で三編みにして使っている人もいれば、革紐を太くしたような専用の紐を使う人もいます。輪のサイズも大きいのが好きという人もいれば、拳がぶつかるほど小さくしている人もいます。持ち方も、ぎゅっと握る人もいれば、小指は外して三本の指をかけて持つ人もいます。要するに、それだけのこだわりをかけるほど、ロープが重要だということです。そんな思い思いのロープを使って、伴走が始まります。伴走の面白いところは、二人がロープを介してつながった状態で、長い時間、同じ動作を共有するということです。「行為」ではない。「動作」を共有するのです。

(伊藤 2020 : 151-152)

このように伊藤によれば、「手と手」をつなぐ「ロープ」を介して共鳴するというコミュニケーションの意味は、ブラインドランナーと伴走者が物理的な時間と空間を共有しながら、具体的には「走る動作を共有」するなかで、その共有するものが「行為」ではなく「動作」をシンクロ(同期)させることによって「共鳴関係」が生み出されるのだという。

そして、その「共鳴関係」の中で長時間にわたる動作をシンクロさせ続けることが、「**接続の安定**」(互いのコミュニケーションの安定)をもたらすのだという。伊藤は、ブラインドランナー(ドラさん)のインタビューを引用しながら以下のような説明を展開する。

走歴7年の全盲の女性ランナー、ドラさんは言います。

走っているときは、二人で同じ動きをしているんです。紐を持ってますけど、腕が触れそうな状態で同じ動きをしていますよね。日常生活では、あっち向いたりこっち向いたりしているし、こちらも、次は車に乗るんだな、とか先にある行動を予想しながら動いています。ランニングだと、予測しなくてもずっと同じ動きを続けられる。

これは、ひとことで言えば、「現在」に集中しやすい、ということでしょう。日常生活においては、次に何をやるのかな、もうそろそろかな、と「先読み」しながら動くのが通例です。

…… (中略) ……

これに対して、伴走は、同じ「走る」がひたすら続いていきます。そこには、「歩いて、止まって、座る」のような行為の文節はありません。すると、「次」に対する予測のスイッチを切ることができる。「どうなるんだろう」という過剰な疑心暗鬼は無用です。もちろん、予測が不要だからこそ、走るという行為の中で起こっている微細な変化について、感度を高めることができる。未来ではなく、現在に集中しやすくなっています。(伊藤 2020 : 152-153)

この「今、この場 (Here & Now)」という「現在に集中」する体験は、クライアントの「個別化」や「受容と共感」を基本原則とするケア(特に、カウンセリング等)における「相談援助」と共通する視点(又は感覚)ではないだろうか。

しかし、ケアの担い手が構築する援助関係は、「共感的な隣人」としてクライアント(利用者・

対象者)の前に立ち現れることで、それはあくまでも「隣人」としての役割を維持しながらもクライアントの心の動き(情緒変容)に同調(シンクロ)する役割を担うことではないとされている。

つまり、援助関係においては、相手の立場(困難な状況)に寄り添いながら「共感する」と「同情する」ことは別な行為なのである。たとえ「同情」からケアが始まったとしても過度な感情移入や情緒的巻き込まれは、危険視される。そこにおいて、「接続の安定」をもたらす「ロープ」にあたるものは、ケア実践における「安定した一定の距離感覚」(=筆者は「絆」と呼ぶもの)だと考えている。

かつて、哲学者・宗教学者のマルティン・ブーバー(Martin Buber, 1878-1965)は対話における「我と汝」の関係性について、以下のように語っている。

私が汝と出会うのは、汝が私に向いよってくるからである。だが、汝との直接的な関係の中へ歩み入るのはこの私の行為である。このように、関係とは選ばれることであると同時に選ぶことであり、受動(Passion)であると同時に能動(Aktion)である。なぜなら、およそ存在の全体をかけた能動的行為においては、あらゆる部分的行為は止揚され、したがって一たんに部分的行為の限界に根ざしているにすぎぬ—あらゆる行為感覚も止揚されてしまうので、その行為の能動性は受動に似たものになってしまうからである。根元語・我-汝は、ただ存在の全体でもってのみ語られ得る。私の存在が集一し溶解してひとつの全存在となることは、決して私のわざによることではないが、私なくしては決して起こり得ない。私は汝との関わりにおいて我となることによって私は、汝を語るのである。あらゆる真に生きられる現実は出会いである。(マルティン・ブーバー 1978:17-18)

ブーバーの「我と汝」の関係を語る言葉の中で、それは「受動」でもあり「能動」でもあり、「存在の全体」における能動的行為において部分行為は止揚され、それに伴う行為感覚も止揚されてしまうため能動行為は受容行為となり、我と汝の関係は、集一され溶解することで、我と汝の関係が誕生する場として、「真に生きられる現実は出会い」であると述べている。このブーバーの対話について語る「我と汝」の関係論は「援助関係論」の中でもときどき引用されるものである。彼の、「私の存在が集一して溶解してひとつの全存在となる」と述べている部分は、ブラインドランナーと伴走者の「ロープ」を介した「手と手の関係」からうまれる「共鳴関係」と通じる内容ではないだろうか。

伊藤は、さらにこの「共鳴関係」という生成的コミュニケーションが発生する理由としてロープのもつ手と手の間に存在する「あそび」の重要性について次のように論じている。

あらためて実感するのは、ロープの力です。もし、二人のランナーがじかに手をつないで走るとしたら、どうでしょうか。おそらく、目の見える伴走者が目の見えないランナーをぐいぐ

い引っ張って連れて行くような走り方になってしまうはずですが。うまく走れたとしても、そこにあるのは相手の体を道具のように扱う一方的な「伝達」のコミュニケーションであって、決して「楽しい、ところが躍る感じ」ではないはずです。共鳴は生まれようもありません。でもロープなら、「あそび」ができる。がちがちに固定されていないつながり方だからこそ、多少動きがずれたとしても、ロープがそのズレを吸収してくれます。走っている側も、ずれたことを感じ取って調整する余裕ができます。……（中略）……重要なのは、このあそびがあるからこそ、ずれを通してお互いの状態を感じ取り合うことができる、ということです。つまり「生成的」なコミュニケーションができる。ゆるいロープによってつながりを間接化することで、二つの体の動きが衝突することなく、混じり合うことができる。（伊藤 2020：156-157）

このように、ブラインドランナーと伴走者をつなぐロープには、ゆるく「あそび」があることにより互いの今の状態（思考・判断・体調・周囲の状況）を自在に感じとることが可能となるという。つまり、「伝えるのではなく、伝わっていく」関係を生み出す「共鳴」は、ロープが二人をつなぐ「神経繊維」のようなものにも感じられると述べている。

このような関係の中だからこそ「生成的」コミュニケーションができるのだという。伊藤は、人間のコミュニケーションのモードについて、＜伝達モード＞と＜生成モード＞の2つを提示し、次のように説明する。

「伝達モード」の特徴は、発信者から受信者へという一方向の作用が想定されている、ということです。発信者が、自身の持っているメッセージを、受信者のもとに届ける。受信者が送信者に干渉するという逆方向の作用は、そこまで想定されていません。……（中略）……「生成モード」の特徴は、この「その場で作られていく」というライブ感です。このライブ感に、発信者も受信者も（と仮に呼びます）巻き込まれているのです。つまり、メッセージがコミュニケーションの外部に存在しているのではなく、それと一体化したものとして、生まれてくるのです。（伊藤 2020：122-125）

このように、伊藤は、コミュニケーションをモード（態度・調子）の視点から、「伝達モード」とは、メッセージの主導権は発信者側の中にあり、一方向的であり、役割分担が明瞭であると述べている。しかし、「生成モード」は、メッセージのやり取り（ライブ感）の中で生まれ、双方向的で、相互の役割分担が不明瞭なコミュニケーションであると述べている。この「生成モード」としてのコミュニケーションは、ケアの担い手が展開する相談支援・看護・介護・介助の援助実践を読み解く示唆に富んだ視点を提示していると理解することができる。

ケアにおける援助関係を構成する枠組（フレーム）として、ブラインドランナーと伴走者の信頼関係に基づく「共鳴関係」を生み出す「ロープ」の果たす役割に注目してみたい。

目の見えるクライアントと支援者（ケアの担い手）との間にある、このロープに対応する「我

と汝」をつなぐもの、結びつけるものは何だろう。それは先述しておいた、目には見えない「信頼関係」と呼ばれる「絆」ではないだろうか。

この「絆」は、自分(我)と他者(汝)をつなぐ「糸」を互いに半分ずつ持っている状態をあらわし、離れがたく断つことのできない「つながり」を意味する。一般的にも、信頼関係を基盤とする人間関係を表現している。

そしてこの「絆」は、目に見えない抽象的なものだが、人は子宮の中の胎児のようにその「絆」の存在を信じることでしか生きていけない存在なのだ⁽⁵⁾。

つまり、丈夫でしなやかな「絆」を持っている人間は、自分の人生という物語を肯定しながら社会の中で他者と親密な自分と他者の存在を感じあえる信頼関係、ここでいう「共鳴関係」を切り結びながら歩んで行けるのだと思う。本稿では、その「絆」を持つ「手」をケアにおける援助関係の「メタファー (metaphor: 隠喩)」として位置づけてみることにしたい。

2. 目が見えない視覚障害者にとっての「手」の役割

目が見えない視覚障害者にとっての「手」の役割を考える時に、「サリバン先生とヘレン・ケラー」との関係思い浮かべる人は多いのではないだろうか。

アン・サリバン⁽⁶⁾ (Anne Sullivan: 1866-1936) 先生は、三重苦(盲聾啞)の障害者であり世界の身体障害者の教育と福祉の啓発活動家として知られるヘレン・ケラー (Helen Adams Keller: 1880-1968) の家庭教師として尽力した人物である。

サリバン先生は、その後「奇跡の人 (Miracle worker)」として知られる女性だが、若きサリバン先生とヘレンの出会いは、とても厳しい現実の中からの始まりであった。

彼女は、家族の哀れみの中で甘やかされ暴君のように育てているヘレンと対峙しヘレンに世界を知るための「扉＝言葉」を指文字で教えようと苦悩し苦闘し、時に格闘させることになる。

そして、ヘレンの中に世界に向かう扉を開く「覚醒」をもたらした衝撃的な場面における「手」の役割を理解するためにサリバン先生とヘレンのそれぞれの視点から描かれた体験を比較検討してみたい。

サリバン先生は、その場面についてパーキンス盲学校の寮母(ホブキンス夫人)に宛てた「手紙」の中で次のように書いている。

今朝顔を洗っているとき、彼女は「w-a-t-e-r」という名称を知りたがりました。彼女は、何かの名前を知りたいときには、知りたいものを指さし、そして私の手をたたきます。私は、「w-a-t-e-r」と綴り、それについては朝食のあとまでとくに考えませんでした。

朝食後、私はこの新しい単語を利用して「mug-milk」のむずかしさを解決できるかも知れないと思いつきました。井戸小屋に行き、私が水を汲みあげている間、ヘレンには、水の出口の下にコップをもたせておきました。冷たい水がほとぼしって、湯のみを満たしたとき、ヘ

レンの自由な方の手に「w-a-t-e-r」と綴りました。その単語が、たまたま彼女の手勢によくかかる冷たい水感覚にとてもびったりしたことが、彼女をびっくりさせたようでした。彼女はコップを落とし、くぎづけにされた人のように立ちすくみました。

(サリバン 1998 : 31-32)

ヘレンは、彼女の自伝『私の生涯』の中で、その同じ場面、その瞬間に自分の中に生じた衝撃的な体験について次のように語っている。

先生は、樋口（筆者注：井戸水を汲み上げるポンプの口）の下に私の手をおいて、冷たい水が片手の上を勢よく流れている間に、別の手に初めはゆっくりと、次には迅速に「水」という語をつづられました。私は身動もせず立ったままで、全身の注意を先生の指の運動にそそいでいました。ところが、突然私は、何かしら忘れていたものを思い出すような、あるいはよみがえってこようする思想のおののきといった一種の神秘的な自覚を感じました。この時初めて私はw-a-t-e-rはいま自分の片手の上を流れているふしぎな冷たい物の名であることを知りました。この生きた一言が、私の魂をめざまし、それに光と希望と喜びとを与え、私の魂を解放することになったのです。

(ヘレン・ケラー 1990 : 30-31)

この有名な場面に存在し生じているものは、サリバン先生の指文字を綴る「手」とそれを受けとめるヘレンの「手」、そしてその互いの手をつなぐ「水 (water)」の感覚とが溶け合い「共鳴」を生み出し、それがヘレンに「覚醒」(=世界に向けて自分の内面から理解する扉を開放した衝撃的体験(感動))をもたらす役割(トリガー：引き金)を果たしたのである。

今あらためて、この奇跡的な二人の出会いと体験を想う時、「教育」という業(営み)には既成の「知識」をただ「教え、伝える」のではなく、主体的に学ぶ中で生じる「感動」が生徒(人)を変えようというのだという確信が生まれる。

更に、もうひとり指文字でコミュニケーションをとる盲聾者である福島智(現在、東京大学・先端科学技術研究センター 教授)の言葉を紹介しておきたい。彼は、「手は心の窓：盲聾二重障害者の伝達の手」と題して自らの体験を通して「手」について以下のような興味深い見解を述べている。

人間の「手」が、常に心の「窓」だったのではないだろうか。外界を認識し、他者とのコミュニケーションをとるときの「窓」が「手」だったように思われるのである。遠い昔、私達の祖先は道具を作り、それを用いて自然に立ち向かった。彼らは、こうした手の操作を通して外界を認識し、知識を獲得していったのである。そして、こうした知識を運ぶ「言葉」はどうだったろうか。原初の人類の言葉は、身振り語あるいは、身振りを伴った音声語だったに違いない。「手」ははじめから人間のコミュニケーションに寄り添っていたのではなかったか。……

(中略) ……他者と「心のふれあい」を持つということは、まさしく「手で触れ合う」ことから始まるのではないか。案外、機械の脅威のもとで色あせていく人類が、今後生き延びていけるかどうか、といった大きな問題とも、どこかでつながっているような気がするのである。

(福島 1993: 239-241)

このように、ヘレン・ケラーも福島智も個人的な経験ではあるが、「手の役割」として言えることは、コミュニケーションの手段(福島によれば、手はコミュニケーションの原型)であり、世界を理解するという衝撃的な感動をもたらし、「人が人を支えあう」ために、そして人類が生き延びる方法として私たちの「手」の果たす役割は極めて大きいのではないだろうか。

3. ケア実践の構成要素としての「手」の意味

次に、「手」の意味について「ケア実践」という文脈に引き寄せて検討する。

伊藤によれば、ブラインドランナーと伴走者をつなぐ「ロープ」によるコミュニケーションは、「生成モード」であるという。この「生成モード」の観点から援助関係を生成する「手」の意味について考えてみたい。

筆者は、生き生きとしたリアル(実感)の伴うケア実践を構成する基本要素として以下の5項目が重要だと考えている。

- 1) 非侵襲性……問題には直接的ではなく周辺領域からアプローチする。
- 2) 同時性……今ここでの出会いを共有する。
- 3) 共感性……共感的な相互理解をもたらす。
- 4) 共同性……共同作業として問題解決に取り組む。
- 5) 余裕感……余裕感(あそび)があることがケアを臨機応変にする。

以下に、5つの要素の意味を「手の意味」と関係付けながら少し解説をしておきたい。

1) 非侵襲性

例えば、多くの場合、人は、痛みを感じると「手」を当てながらその部位を確認しようとする。具体的には、身体の外傷や内部から生じる疼痛の場合、直接自分の手で、その部位を押さえようとする。しかし、ケアの担い手は、痛み(問題)の周辺部に触れながら非侵襲的なアプローチをすることで相手に不安を与えない立場に位置することができる。

2) 同時性

これは、まさに「一期一会」という意味として理解して欲しい。ケアの現場での出会いは、「今という同じ時」の出会いは二度と無いものとして、「今という現在を大切する」ことである。茶の湯での「もてなし」はお手前を拝見することになる。ケア(看護・介助)の場合においても、直接、身体に「手」を添えることで心理的な安心感をもたらすことの有無について自覚的であり

たい。近年は、バイタルサイン（脈拍・血圧）の計測などはモニターにつながり場面が多くなり、医師も看護師もモニターの数字を覗いて、患者に触れなくなりつつあることは、患者の不安（気持ち）への配慮（ケア）を欠いているのかも知れないことに意識を置いて欲しい。

3) 共感性

ケアを必要とする人（対象者）は、「何かを喪失している存在である」と理解することを先に提案しておいた。喪失体験には何らかの「悲嘆・断念」という「こころの痛み・不安」が生じる。この「こころの痛み・不安」を「共感性」を基本として向き合うことで、情緒的な巻き込まれを回避しながら対象者との信頼関係（安心）を形成するケアの可能性を大きく広げることになる。その場合の「手」は、「信頼関係」という目には見えない「絆」となっている。

4) 共同性

ケアの担い手の援助には、対象者の問題の解決・緩和・解消に向けて一緒に共同作業として取り組むという「共同性」を保持した態度で向き合うことが必要である。孤独（孤立）は、「人」の心身を弱くし、存在感を希薄化する。仲間がいること、理解者と連帯しているという「手」をつなぐ関係が人をケア（＝強く支える）することになる。セルフ・ヘルプグループ（SHG：自助グループ）といった当事者同士の自助活動などはその典型でもある。

5) 余裕の保持

ケアの支援方針には、「余裕の保持」をしておかないと破綻するリスクが高まるので要注意である。ケアの担い手が、余裕感がなく焦っている場合は、対象者（クライアント・患者・利用者）を緊張させ、評価的で審判的な態度を示し、相手を管理コントロールしようとする傾向に陥りやすい。ケアの場面では、「手放す」関係と言うべき「自由／あそび」の部分の保障（保護）する関係が長期的にみると対象者の「主体性・自主性」と「問題対処能力（コーピング）」を涵養することになる。

以上、ケアの基本要素のまとめとして、筆者は以前、ユング心理学者の河合隼雄（1928-2007）のセミナーに参加したとき、「カウンセリングでよく言う受容と共感の本質には、クライアントを冷たく抱きしめて、暖かく突き放すという態度（姿勢）が重要なんだよ」という彼の言葉を思い出す。そこにはまさに、「抱きしめる手」と「突き放す手」の存在が暗示されていたのであった。

Ⅲ. 相互関係の文脈における手の意味～「手」の中の道徳と倫理～

1. 「手」の中の道徳と倫理～「さわる」と「ふれる」の違い～

「手の倫理」について伊藤は、哲学者・坂部恵の『「ふれる」ことの哲学』の言説⁽⁷⁾（注参照）を

ふまえながら以下のように述べている。

「ふれる」が相互的であるのに対し、「さわる」は一方的である。ひとことで言えば、これが坂部の主張です。

言い換えれば、「ふれる」は人間的なかわり、「さわる」は物理的なかわり、ということになるでしょう。そこにいのちをいつくしむような人間的なかわりがある場合には、それは「ふれる」であり、おのずと「ふれ合い」に通じてきます。逆に、物としての特徴や性質を確認したり、味わったりするときには、そこには、相互性は生まれず、ただの「さわる」にとどまります。(伊藤 2020:5)

さらに伊藤は、ケアの場面における「さわる」と「ふれる」についても次のように述べている。

ケアの場面で、「ふれて」欲しいときに「さわら」れたら、勝手に自分の領域に入られたような暴力性を感じるでしょう。逆に触診のように「さわる」が想定される場面で過剰に「ふれる」が入ってきたら。その感情的な湿度のようなものに不快感を覚えるかも知れません。ケアの場面において「ふれる」と「さわる」を混同することは、相手に大きな苦痛を与えることになりかねないのです。(伊藤 2020:7)

このように、人と人が接触する場面は、「握手する、ハグする」という手を使う行為を日常的な習慣としている文化風習(民族)がある。人間の冠婚葬祭や日常場面を考えただけでも、子育て、介護、介助、スポーツ競技(例:相撲・レスリング・ボクシング・柔道・ラグビー)、性愛、看取りの場面などがあることが理解されるだろう。しかし、問題なのは「手」には、「癒やしの手」もあれば、「罪深い手」もあるということだ。そこには、「道徳」と「倫理」の問題が横たわっている。

「道徳」とは、「人々が善悪をわきまえて正しい行為をなすために、守り従わねばならない規範の総体。外面的・物理的強制を伴う法律と異なり、自発的に正しい行為へと促す内面的原理として働く」、「倫理」とは「人として守り行うべき道。善悪・正邪の判断において普遍的な規準となるもの。道徳。モラル」(デジタル大辞泉)

「道徳」とは、<正しい行為をなすために、守り従わねばならない規範>であることに対して、「倫理」は<善悪・正邪の判断において普遍的な規準となるもの>という違いがある。この違いについて「個人」の問題として引きつけると「道徳的である」ことは、自発的内面的原理として枠組み(ルール)に従うことが要請される。

しかし、「倫理的である」ことは、判断において普遍的な規準となるが、人として守り行う道

かどうかについては、その状況において自分の人としての主体的な考え（思考／判断）が問われてくる。つまり、道徳と倫理には「対峙する問題」への「態度と思考方法」に違いがある。

その意味では、「道徳的」であるかどうか、「倫理的」であるかどうかは「その人」の存在様式（生き方・振る舞い方）が「深く、そして強く」問われている。

つまり、ケアを担う「手」は、道徳的であるべきなのか、倫理的であるべきなのか。それとも、その両方なのか。確かなことは、ケアが展開される〈関係の文脈〉の中からその「手の意味」を掴み取らなければならないということだ。

2. 「ケア」と「手」の両義性

その意味で「手」は、人を「ケアすること＝援助・支援・救済する」が、その反面、同じ「手」で人を「殺めること（殺人）＝罪を犯す」ものでもある。つまり、「手」の中には、「光と闇」の両義性が存在している。

マクベス夫人が犯した罪から正気を失い、夢遊病者のように真夜中に手を洗い続けながら「手」について呪わしい染みから漂う血の匂いに怯え、香水をいくらふりかけても消えないことに苦悶する場面（シェークスピア・『マクベス』「第5幕・第1場面」）（シェークスピア 2008：156-157）が印象的だ。

同様に、障害福祉分野では、元職員であった植松聖（死刑囚）が引き起こした「やまゆり園・障害者殺傷事件」（2016年7月深夜・19人刺殺・26人刺傷）は、彼自らの「手」で重度の知的障害者（彼の定義では「心失者」）を選別しながら19人を殺害するという悲惨なものであった。

この「手」の両義性は、「ケア」の両義性と通じていると理解することができるのではないだろうか。

筆者は、ケア（care）という言葉は本来、「注意を払い、気にかけること、苦勞しないこと」を本義とし、「心配、不安、面倒、負担、厄介、重荷、気がかり」という消極的で否定的な感情を表現する意味と、「注意、配慮、世話、努力、監督、維持、責任」という人が人との関係を維持・発展させる場合に必要不可欠で積極的な意味の二面性を併せ持っている（結城 2013：12）ことを指摘したことがある。この時、ケアが抱えるジレンマという両義性を指摘した。

その意味で、「ケア」と「手」には、その本義において共通の「光（世話・援助・配慮という肯定的側面）」と「闇（厄介・重荷・負担・面倒という否定的側面）」を抱えているのである。

したがって、ケアの担い手の行為（業）^{なりわい}は、人間の剥き出しの「弱さ（脆弱さ）」をもつ身体（からだ）の傷や心（こころ）の「痛み」に「さわる」と同時に「ふれる」のである。その時のケアの担い手は、自分の「手」の中に存在する「光と闇」の両義的な意味に真摯に向き合う自覚的存在でなければならない。

おわりに：レオナルド・ダ・ビンチは何を解剖したのか？

人間は、進化の過程で樹上生活からアフリカの大地に降り立ち二足歩行をすることにより2本

の「手」を獲得した。その手で「道具(=手の機能の延長となるツール)」を作り、「文字言語」を生み出し、さまざまな遊び・スポーツ・絵画やアート作品(絵画やオブジェ)、巨大な建造物まで作り上げる存在となった。

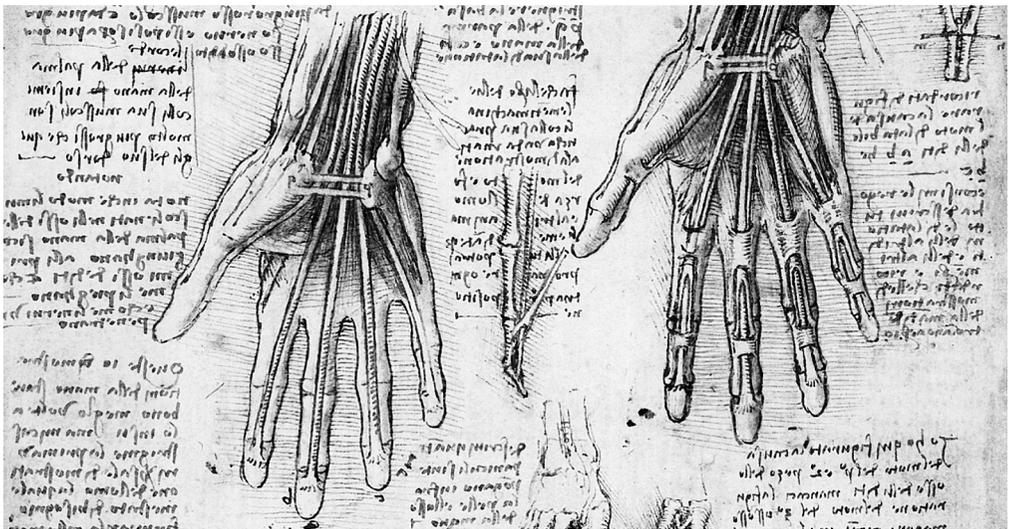
最後に、レオナルド・ダ・ビンチ(Leonardo da Vinci: 1452-1519/以下、レオナルドと表記する。)の人体解剖図に描かれている「手」の解剖図を手がかりに「手の意味論」の意義について提案をしてみたい。

なぜ、レオナルドは、これほどまで人体解剖に取り組んだのだろうか。諸説あるが、彼は「人体という自然の存在をより深く理解するために行なったのではないか」とか、「正確に人物を描くためには正確な人体の機能と構造を理解しなければならないと考えていたからだ」と言われることが多い。

筆者は、次のように考えている。レオナルドは、子どもの頃からさまざまな動物・植物や自然現象に飽くなき興味をいだき、その美醜による主観的な判断よりも、冷静な観察に価値を置いていたのではないか。彼の描く絵画は極めて精密な陰影と質感が施されている。そこにはまるで自然の「いのち」が宿っているようだ。それを実現させるために、彼は人体の表面を観察するだけでなくその奥に潜むものを自らの「手」で「腑分け(解剖)」して直接観察したいという尋常ではない情熱を抱いたのだと思う。その秘密が彼の「人体解剖図」を通して見えてくる。

本稿のテーマが「手の意味論」である関係で「手」の解剖手稿を引用したが、レオナルドは「見えているものの背後に存在する、見えないもの」を見抜こうとする情熱と探究心の持ち主だったのだ。本稿では、ケアにおける「手」の意味について検討してきたが、人間の社会は、人間が自由に使える「手」が創造したものとも言えるのではないか。

解剖学者の養老孟司は、『唯脳論』の中で、「ヒトを知ることは、脳の機能形式を知ることだ。



(出典：マーティン・クレイトン+ロン・フィロ(高橋彬 監修・東京芸術大学美術解剖学講座 訳)(1995)『レオナルド・ダ・ビンチ「人体解剖図」』同朋舎出版p.114 顔面と腕と手の解剖 一部抜粋)

自然の中に存在しない人工的なもの（社会という組織・制度・経済・物）は全ては「脳」が生み出したものである。心（こころ）も脳という物質の機能が生み出したものである」と喝破している。「手」の刺激は、大脳の運動野と知覚野の半分を占めるため「手は第2の脳」であるとさえ言われることがある。一般的に「百聞は一見に如かず」と「視覚」の優位性が主張されることが多い。しかし、「手」からのリアルな「触覚」はそれに勝るとも劣らないのでないか。なぜなら人の「生老病死」を最後まで「ケア」するのは何時だって私たちの「手」が担っているのだから。

注

- (1) 尚、本稿のテーマは「手」であるが、生まれつき両手が無くとも、両足の指を巧みに使ってキーボードを打ち原稿・論文を執筆したり、口に筆を咥えて素晴らしい書や絵画を描く身体障害者の存在を排除していない。本稿で意味する「手」は、「手」のメタファー・表象（シンボル・アイコン）として使用することを予めお断りしておきたい。
- (2) 第1回目は、2020年4月7日（7都道府県）・16日（全国拡大）に発出された。さらに、第2回目の「緊急事態宣言」が2021年1月7日（11都道府県）に発出された。
- (3) この問題は、予想されていた「第3波」に備えた保健医療政策者側の不備であることは明白なのだが、本稿は新型コロナ禍における医療施策を検討するものではないのでこれ以上の言及は行わないことにした。
- (4) 日本福祉文化学会 研究委員会編（2020）『私たちのメメント・モリ＝死を想う経験＝』日本福祉文化学会（福祉文化ブックレットNo1）において、「死」と向き合う「私」の様々な経験が語られている。内容としては、「自殺問題を考える」・「家族の死の看取り方」、「自分の死に方」、「援助専門職（精神科医・ケアマネジャー・介護福祉士）が利用者の死と向き合った時」等が記述されている。
- (5) 母体の中にいる胎児はまさに胎盤から伸びる臍の緒（an umbilical cord）で母体とつながり母体からの栄養補給・酸素・老廃物の供給と循環を行っている。その際、母体側の体調の変化・ストレス刺激（血液中のストレス・ホルモン）の影響も受けることは小児医学の研究からも明らかにされている。（<https://www.sing.co.jp/cms/of/list/file/OFvol07-JR.pdf>）（2021年1月29日）
- (6) サリバン先生は、マサチューセッツ州スプリングフィールドのアイルランドから移民した貧困家庭に生まれ、10歳の時に救貧院に収容され悲惨な少女時代を過ごす。その後、目の病気を患いほとんど全盲に近い状態になったため、14歳の1880年10月にパーキンス盲学校に入学。その後、何回か目の手術を受けて視力が幾分回復したが、光の刺激に目が弱いためサングラスをかけて生活をするようになる。1886年に学校を卒業すると、アナグノス校長からヘレン・ケラーの家庭教師に推薦されて、1887年3月からヘレンの教育を始めることになった。（サリバン 1998：10の筆者要約）
- (7) 愛する人の体にふれることと、単にたとえば電車のなかで痴漢が見ず知らずの異性の体にさわることは、いうまでもなく同じ位相における体験ないし行動ではない。一言で言えば、ふれるという体験にある相互嵌入の契機、ふれることは直ちにふれ合うことに通じるという相互性の契機、あるいはまたふれるということが、いわば自己を超えてあふれ出て、他者のいのちにふれ合い、参入するという契機が、さわるということの場合には抜け落ちて、ここでは内-外、受動-能動、一言でいってさわるものとさわられるものの区別がはっきりしてくるのである。（坂部

1987:27)

引用参考文献

- 福島智 (1990) 『「手」はこころの窓：盲聾二重障害者の伝達の手』、山田宗睦他共著 『手は何のためにあるか』 風人社
- ヘレン・ケラー (岩橋武夫訳) (1964) 『わたしの生涯』 角川文庫
- 伊藤亜紗 (2015) 『目の見えない人は世界をどう見ているのか』 光文社新書
- 伊藤亜紗 (2020) 『手の倫理』 講談社
- マルティン・ブーバー (田口義弘訳) (1978) 『我と汝・対話』 みすず書房
- マーティン・クレイトン+ロン・フィロ (高橋彬 監修・東京芸術大学美術解剖学講座 訳) (1995) 『レオナルド・ダ・ヴィンチ 「人体解剖図」』 同朋舎出版 p.111 & p.114 顔面と腕と手の解剖 一部抜粋)
- 小此木啓吾 (2000) 『こころの痛み—どう耐えるか』 NHK出版
- サリバン (遠山啓 序 / 横恭子訳) (1998) 『ヘレン・ケラーはどう教育されたか—サリバン先生の記録—』 (改定第6版) 明治図書
- 坂部恵 (1983) 『「ふれる」ことの哲学—人称的世界とその根底』 岩波書店
- シェークスピア (安西徹雄 訳) (2008) 『マクベス』 光文社 (古典新訳) 文庫
- 山口創 (2018) 『手の治癒力』 草思社文庫
- 養老孟司 (1989) 『唯脳論』 青土社
- 結城俊哉 (2013) 『ケアのフォークロア：対人援助の基本原則と展開方法を考える』 高菅出版